

詩におけるトーンの機能管見

斉藤 昭 二

詩におけるトーンの機能管見

斉 藤 昭 二

The first voice is the voice of the poet talking
to himself — or to nobody.

—T. S. Eliot, *The Three Voices of Poetry* —

I

Cleanth Brooks and Robert Penn Warren, *Understanding Poetry* 第4版 (1976)¹⁾ にはディラン・トマス (Dylan Thomas, 1914-53) の詩が3篇 (“Do Not Go Gentle into That Good Night”, “The Force That Through the Green Fuse”, “A Refusal to Mourn the Death, by Fire, of a Child in London”) 収録されており, “A Refusal to Mourn the Death, by Fire, of a Child in London” (以下 “Refusal to Mourn” という) は詩におけるトーン (tone) の問題を扱った第3章の「死と哀悼 (Death and Mourning)」のテーマを考察する第I節に演習題として収められている。

詩において果たすトーンの機能とは、両者によれば、

The *tone* of a poem indicates the speaker's attitude toward his subject and toward his audience, and sometimes toward himself.²⁾

のごとく、「語り手の態度」を示すもので、日常の会話においても我々は、語られる内容に加え、話し手が話す内容に対してどのような態度をとるか、即ちどのような声の調子や表情でそれを語るかということから、話し手の真意を推し測っているのである。例えば、人にものを依頼する場合、相手が ‘Yes.’ という返事をして、それはその言い方により肯定から否定を含むかなりの数の意味をもつものである。詩人の場合、詩作品の中で声や表情を用いることはできないから、文字通りに表現された表面的な意味の裏に隠された真意を伝えるために、詩人は様々な工夫を無意識のうちにも凝

らす。そして、逆に言えば、詩を読む場合、我々は通常期待される表現とは違った言葉づかい・語順・韻律等一会話における声の調子や表情にあたるもの一を手掛かりとして、表面的な意味の裏に隠された作者の真意を推し測るのであり、これが詩におけるトーンの問題の生まれる所以である。

既に述べたように、トマスの“Refusal to Mourn”は「死と哀悼」のテーマを扱う節に演習題として取り上げられているが、詩におけるトーンの問題という観点からすると、この詩には「死と哀悼」というテーマを扱うには不適當と思われるトーンが用いられており、編者ブルックスらも

Why does the speaker refuse to mourn the death of the child?

How does the fact of refusal set the tone of this poem?³⁾

という設問をこの詩に付している。

この小論では、詩におけるトーンという観点からこの詩を考察し、その過程でトーンの機能に関して若干の補足を加え、併せてそこに窺われるディラン・トマスという詩人の特徴を考えてみたい。

II

「死と哀悼」というテーマを扱うのに不適當と思われるトーンを生む表現がこの詩には二個所ある。一つは表題に見られる‘Refusal’という言葉であり、もう一つはこの詩の冒頭に用いられた‘Never...’という強意の否定辞である。‘Refusal’という言葉は焼死した一少女の死を悼むことをあくまで「拒否する」という作者の強い意志を表現する言葉であり、彼はその気持ちを本文の中でも冒頭において、しかも‘Never...’という‘not’よりはるかに強意の副詞で繰り返し主張する。何故彼はこれほど強い、そして読者にとっては大変挑発的な表現を、即ちこれほど強いトーンをこの詩で用いねばならなかったのか。

「死と哀悼」というテーマを扱うのであるならば、これほど強い拒否の表現を補って余りある十分説得的な拒否の理由が本文の中で語られねばならない。そしてこの焼死した少女はトマスに身近な人物の死ではない一社会的事件であり、彼女の死が第二次大戦中におけるドイツ軍のロンドン大空襲による人災である以上、この少女の死を悼む気持ちを表現するのである

ならば、当然この少女の死をもたらした時代の不条理性—何故ならイギリス軍とドイツ軍の戦いはこの少女の生とは無関係に引き起こされたものなのだから—に対する洞察が含まれねばならないだろう。

それではこの少女の死を悼むことを拒否する理由をトマスはどのように述べているのだろうか。各6行4連の枠組みを取り払えば、この詩は四つの文 (① ll. 1-13, ② ll. 14-18, ③ ll. 19-23, ④ l. 24) から構成されている。各文の意味を整理してみると、

- ① Never until the mankind making
Bird beast and flower
Fathering and all humbling darkness
Tells with silence the last light breaking
And the still hour
is come of the sea tumbling in harness

And I must enter again the round
Zion of the water bead
And the synagogue of the ear of corn
Shall I let pray the shadow of a sound
Or sow my salt seed
In the least valley of sackcloth to mourn

The majesty and burning of the child's death.

(ll. 1-13)

この文は三つの条件からなる副詞節と一つの主節から成っている。第一の条件は「人類を創造し、鳥や獣や花の父となり、あらゆるものを謙虚ならしめる暗闇が最後の光が明けつつあるとひそやかに告げるまでは」。第4行で「最後の光(the last light)」と言っている以上、この光は永続的なわけで、これは永遠 (everlasting) の世界を意味するだろう。従ってこの条件は「(この世の死を契機として)現実の生命が永遠の生命界へ移行するまでは」ということを創世記のイメージを用いてうたっている。

第二の条件は「静かな時間が日常のことに関わり波立つ海から生まれる

までは」。第6行目の 'in harness' は 'in the routine of daily work' (C. O. D.) の意味があるから、この海は日常の煩雑さに関わり騒然とした現実世界の比喩であり、そこから静かな時間が生まれるまではと言っているのだから、これも第一の条件と同じく「現実世界の終わり、永遠の生命界の到来」を意味している。

第三の条件は「僕が、水玉の丸いシオンの山や麦の穂のユダヤ教会堂に再び入って行かねばならなくなるまでは」。シオン山はキリスト教会堂の意⁴⁾であり、それとユダヤ教会堂が水滴や麦の穂といった自然のささやかな事物と一体化されているから、これはどんなにささやかな自然にもやどる、自然に内包された宗教的世界の意で、そこに作者が再び（というのは作者はかつてそこから生まれたのだから）入って行かねばならないときは、作者が死んで再び自然界に戻っていくということで、これもやはり第一・第二の条件の言い換えであるととれる。

主節は「僕は音の影に祈らせたり、僕の塩の種を荒布の小さな谷間に蒔いたりして、その子の死の荘厳さや焼死を悼むことはしない。」第10行目の「音の影 (the shadow of a sound)」は影のような（→実体のない、意味のない）吊いの言葉、あるいは第18行目の 'elegy of innocence and youth' から、子供の死を悼む挽歌。第12行目の「荒布 (sackcloth)」は旧約エステル記のモルデカイの逸話を踏まえた表現⁵⁾で哀悼の意を暗示するもの。従って「・・・僕の塩の種を荒布の小さな谷間に蒔いたりして・・・」は哀悼の気持ちから涙を流すということをやはり聖書のイメージを用いてうたっている。

結局、第一の文で言っていることは、死んで（永遠の生命の約束される）自然と一体になるまでは、逆を言えば、生きているかぎりには、この子の焼死を悼むことはしないという作者の宣言を表題通り繰り返しているのである。

- ② I shall not murder
 The mankind of her going with a grave truth
 Nor blaspheme down the stations of the breath
 With any further
 Elegy of her innocence and youth.

(II. 14-18)

第二の文は「僕は(死に関する)重大な真理を持って進む彼女の属する人類を殺すことはしないし、無邪気さと若さの挽歌をこれ以上作って、息のたどる道筋を冒瀆しない。」第15行目の‘a grave truth’は‘grave’が「重大な」「墓」という二つの意味を持っているから、死に関する重大な真理ということで、これは第三・第四の文で述べられる生死に関するトマスの思想を指す。第16行目の‘the stations of the breath’は‘the Stations of the Cross’という表現をもじったもので⁶⁾、‘the Stations of the Cross’がキリスト受難中の諸事件を形象化した教会画であるから‘the stations of the breath’は生命の息吹を持った人間のたどる運命の数々を意味する。

結局、第二の文の意味は、人類は(トマスの抱いている)生死に関する重大な真理をもって運命の数々を歩んでいくのだから、焼死した子供の死を型通りに涙を流したり、挽歌を作ってその死を悼んだりすることは、かえって重大な真理を冒瀆することになるのだと、焼死を悼むことを拒否する理由を間接的に述べているわけである。

- ③ Deep with the first dead lies London's daughter,
 Robed in the long friends,
 The grains beyond age, the dark veins of her mother
 Secret by the unmourning water
 Of the riding Thames. (ll. 19-23)

第三の文は「最初の死者と共にロンドンの娘は深く横たわる、長い間の友人や時を超越した穀物や母親の血管に包まれて、波打つテムズの悼むことをしない水の傍らでひそやかに。」第19行目の‘with the first dead’は聖書アダムとイヴのイメージで、人類の始祖以来すべての人間がここで述べられる運命をたどることを暗示する。焼死したロンドンの娘のように死んだ者は土中深く埋められるが、そこには時を超越した穀物という糧があり、あらゆる栄養素を運ぶ母なる大地の血管が走り、そして傍らには水源があるのだから、この死者は単に無に帰してしまうのではなく、必ず植物のように再生するという印象を与える。これは“*And Death Shall Have No Dominion* (1936) の最終4行：

Though they be mad and dead as nails,
 Heads of the characters hammer through daisies;
 Break in the sun till the sun breaks down,
 And death shall have no dominion.

(ll. 24-27)

で語られる死生観と同内容の思想である。

④ After the first death, there is no other.

(l. 24)

第三の文で述べられる理由から、即ち人はこの世の死を契機として自然に内包される永遠の生命界へ参入するのだから、「最初の死の後には、もはや死はない。」という第四の文の結論に至るのである。

結局、この少女の不条理な死を悼むことを拒否すると言いながら、トマスはその拒否の理由を時代に対する洞察の中に求めるのではなく、死と生に関する自らの思想を提示するにとどまる。従ってこの詩は第二次大戦中ドイツ軍によるロンドン大空襲で死亡した一少女の死を悼む「死と哀悼」の詩であるとは言い難い。

では 'Refusal', 'Never... shall I' という強い表現による大変挑発的なトーンは何のために用いられているのか。

III

この問題を解決する上で有益な示唆の一つは、さきのブルックスらによる詩におけるトーンの機能についての解説—「詩のトーンは、主題や聴衆に対する、そして時には自らに対する語り手の態度を表す。」—である。

'Refusal', 'Never... shall I' という強い挑発的な表現から生まれるこの詩のトーンは確かに作者の必要以上の「力み」を伝えている。しかし、その「力み」は何に対する「力み」なのか。

この点で有益なもう一つの示唆は、同時代の詩人 T. S. エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888-1965) の講演 *The Three Voices of Poetry* (1953) の一節である。自らの詩作の経験に基づき、エリオットは詩人が作

品の中で用いる声を三つに分類している：

The first voice is the voice of the poet talking to himself — or to nobody. The second is the voice of the poet addressing the audience, whether large or small. The third is the voice of the poet when he attempts to create a dramatic character speaking in verse; when he is saying, not what he would say in his own person, but only what he can say within the limits of one imaginary character addressing another imaginary character.⁷⁾

詩のトーンは対象に対する「詩人の態度」を示すのみならず、語りかける対象そのものをも明らかにする一助となる。詩人は時に「第一の声」—自らに語りかける声—を用いるのである。さきの詩において、ディラン・トマスは、田中清太郎氏が指摘するように⁸⁾、自らに対して力んで語りかけているととるのが自然であろう。

トマスは詩人として出発した10代の若さにおいて既に死を問題にし、死を恐れ続けた。1933年9月に発表した詩において、彼は次のように死を考えている：

Thinking of death, I sit and watch the park
Where children play in all their innocence,
And matrons on the littered grass
Absorb the daily sun.

(“That Sanity Be Kept”, ll. 9-10)

18才の若さで既に死を問題にし、死を恐れている。それは“Fern Hill”(1945)等の詩にうたわれた彼の幼年時代が余りにもすばらしいものであったのであり、何であれそうしたすばらしい生を無慈悲に奪い去るものは彼にとっては承服できない悪に他ならなかったのであり、そうした悪をかれに鋭敏に感じさせる要素が彼の生いたちには多過ぎたということかもしれない—病弱な体、二つの大戦の戦間期に鋭敏な青春期を送ったということ等々。そうした人間が、たとえ“And Death Shall Have No Dominion”等の詩においてうたった、人は死を契機として姿を変え、自然のより

大きな生命界に参入するという思想を発展させたとしても、やはり一少女の死を身近に見聞すれば、今一度自らに死は恐れるに足るものではないと力んで語りかける気持ちになっても不思議ではないだろう。

トマス同様若い頃より死を問題としたジョン・ダン (John Donne, 1572-1621) も、後にはセント・ポール大聖堂の Dean という栄職を極めながらも、その過程においては時折り次のような詩を書き、死に挑戦している：

Death, be not proud, though some have callèd thee
Mighty and dreadful, for thou art not so:
(*The Holy Sonnets*, VI, ll. 1-2)

IV

“Refusal to Mourn” という詩を生む契機となった少女の死はドイツ軍によるロンドン大空襲という第二時大戦中の一事件が引き起こしたあくまで時代色の濃い問題であり、ディラン・トマスの内面世界とは別個の問題である。そうした時代に固有な問題は、オーデン (W. H. Auden, 1907-73), スペンダー (S. Spender, 1909-), オーウェル (G. Orwell, 1903-50) 等の作家ならば、そうした性格のものとして受け入れたであろう。ある意味では、こうした問題に対しては、ペンを捨てスペイン内戦 (1936-39) に参戦した彼らの行動のほうがかはるかに有効であったかもしれない。しかし、トマスはそうした現実の外界世界も常に自分自身の内面世界との関わり合いで受けとめている。これはなにもトマスが彼らに較べてマイナーな詩人あると言っているのではなく、あくまでそうした試作上の特徴をもった詩人であったということである。逆にある時代に固有な問題意識が薄れゆく未来においては、いつの時代の青春にも共通する普遍的な問題を扱ったトマスのほうがより多くの読者に訴えていくと言えるかもしれない。

NOTES

- 1) Cleanth Brooks and Robert Penn Warren, *Understanding Poetry* (Holt, Rinehart and Winston, 1976)
- 2) *Ibid.*, p. 112.

- 3) *Ibid.*, p. 178.
- 4) 田中清太郎・羽矢謙一共訳「ディラン・トマス全集」(国文社, 1975) 第 I 巻の注 (p. 365) による。
- 5) M. C. コルカット他編注「現代英詩選」(北星堂, 1970) の注 (p. 85) による。
- 6) *Ibid.*, p. 86.
- 7) Kazumi Yano ed., *Poetry and Drama and Other Essays by T. S. Eliot* (松柏社, 1979), p. 42.
- 8) 田中清太郎, 「ディラン・トマス研究」(国文社, 1968), p. 35.